

妖精の取り分

いも

「……そこで、何してるの」

私のおばあちゃんの家の庭には、おばあちゃんが長年大事にしている木がある。幹はどこか頼りなくて、四月に咲かせる薄い桃色の花もこぢんまりとして地味だけれど、この辺り一帯の住宅街にある、たくさんの家の庭の中で、春に桃色が見えるのはこの家の庭だけ。夏のこの木も、なかなか良い。なによりおばあちゃんも私も、縁側からこの木を眺めながら、お煎餅だのクッキーだのを齧るのが好きだ。そんなお気に入りのお木が最も華やかになる四月初旬、おばあちゃんがお買い物に出かけている昼下がり、私しかいない今。庭を囲う、柵と呼ぶには頼りなさすぎる柵越しに、その木に触る不審者が現れた。

「そこで、何してるの」

私はおばあちゃんに、この春からここに居候させてもらっているのだ。私は料理が下手だし、おばあちゃんが「物の位置が変わると嫌なのよ」と言うから、掃除の手伝いもししていない。ならばせめて、番犬の代わりくらいにはならねば。私は勇気を出して、もう一度言った。

数十秒にも思える間、縁側にステテコを履いて突つ立った私と、柵の向こうから木の幹に手を添えるパーカーを着た男の睨み合いが続いた。

やがて、不審者は目深に被ったフードを恐る恐る脱いで、こ
う言い放った。

「桜の妖精です」

へつぱり腰で、間抜けな声を出したその不審者は、拍子抜けする童顔で私を見つめる。私と同じ年くらいの男だった。嘘みたいに分厚い丸眼鏡に不釣り合いな、淡いピンク色の髪。色白で、全体的に細い。道端で人間に遭遇した野良猫のような顔で、繰り返す。

「桜の妖精です」

「嘘おっしやい」

ついこちらにも、芝居がかつた台詞が出てしまう。男は黒いカメラを構えて、申し訳なさそうにシャッターを押す。

「何撮ってるの、やめて！ 私をネットに晒す気？」

「映っちゃうんでどいてもらって……。すみせん、桜撮りた
いただけなので……」

なぜ桜の妖精がわざわざ桜をカメラに収める。

「やめなさい！ 写真を今すぐ消して。消さないなら警察呼ぶけど」

警察、という言葉が効いたのか、自称桜の妖精はカメラの写真を消し、いかにも走り慣れていない人のフォームで家治いの道路を走り去っていった。

おばあちゃんがスーパーマーケットから帰ってくるなり、私は自称桜の妖精男の話をした。混乱のあまりひどくどもり

ながら、息を切らして話す私に対して、おばあちゃんはけたけた笑うだけだった。

「おばあちゃん、笑ってる場合じゃないって！」

「く、ふふ、ほほほ……桜の妖精ね。おかしいじゃないの」

「確かにおかしいけどね、二重の意味でね。でも不審者だよ、不審者」

おばあちゃんはやかんに水を入れたり、餡色の戸棚からお煎餅を出したりしながら、「別にかまわないよ、私は。写真撮りたいなら撮らせてやんな」とまた笑う。

「おばあちゃんー！」

「なに、そんな目くじら立てんでいいじゃない」

おばあちゃんがお煎餅を一枚、私の膝にポイと乗せてくれた。

「ありがと。……でも、なんで……」

「だって」

おばあちゃんは窓の向こうでさわさわと踊る木を、目を細めて見上げる。夕暮れに染まる木は、まるで影絵のようにその影を空に映す。

「おじいちゃんも、あの木を撮るの好きだったもん」

嬉しそうな声でそんなことを言われたら、もう何も言い返せなかった。私も、「良い桃色だ」と得意げにカメラを構えるおじいちゃんが好きだったから。

次の日の昼下がりに、またあの自称桜の妖精が来た。

「ねえ、昨日も言ったけど……」

今日、男が首から提げているのは、カメラではなかった。光沢のある黒とは正反対の、真っ白な画板。その上にはスケッチブック。男は無言でへこりと頭を下げた。

「今度は何」

「撮影NGとのことなんで……。桜以外は一切描かないんで……」

男は申し訳なさそうにスケッチブックをパラパラ開き始めた。

「ちよつと！へこり、じゃなくて」

男はもはや私には目もくれず、パーカーのポケットから出した鉛筆で木をスケッチしていく。

なんだ、この男は。言葉は常に尻すぼみ、へこり、またへこりと頭を下げる、一挙一動に「申し訳なさそうに」という形容動詞をつけられる。しかし、断固として写真は撮る、スケッチもする。

警察を呼ぶことも考えた。けれど、男は「やめろ」とこちらが言ったことには従うし、柵を越えて家の敷地内に入つてこようとはしない。それに、昨日のおばあちゃんを思い出すと、とても大事にする気は起きなくなつてしまった。

とはいえ、一瞬でも目を離すことは怖かったので、私は男の様子をじつと監視することにした。

「……描き終わったら帰って」

へこり。

「一応聞いておきたいんだけど、名前は何？」

「桜です」

「ふざけてる？」

「いや、そういうわけじゃ……」

「大学生？」

「へこり。意外だ……。なんだか急に、タメ口で話すことが躊躇われる。しかしそれもおかしな話だ。向こうはいまだに不審者の域を出ていないのだから、私がへりくだってやる必要はない。

「一年？ 十八歳？」

「へこり。よし、私が一歳年上だ。遠慮なくタメ口をきいていこう。極力話しかけたくはないけれど。」

桜(仮に桜とする)は、かれこれ一時間、ひたすらに木とスケッチブックとの間に目を行き来させて、鉛筆を走らせている。大した集中力だ。それをただ監視している私は暇で仕方がない。

「……桜なら近くの公園にあるのに。そこじゃダメなの？」

また曖昧で尻すぼみな返答が返ってくるだろう……。自分で意地の悪い質問をしておきながら、答えを聞くだけ馬鹿らしいと思ってしまった。

「この桃色が良いんです」

「……やっぱり、聞かなきゃよかった。」

桜は次の日も、その次の日も木を描きに来た。雨が降ればビニール傘をさして来る、風が強日は変な犬のヘアピンで前

髪を留めて来る。二週間は経つただろうか……。いつの間にか画材が鉛筆から筆と水彩絵の具に変わっていた。

「……あの、いつまで来る気？」

「来週の水曜日まで……」

「妙に具体的だ。」

「来週の水曜日？ それまでに描きあがるの？」

桜を見かけるとお茶を出そうとするおばあちゃんに気を遣つてか、おばあちゃんが買い物(買い物をする必要が無くて、おばあちゃんは同じルートで散歩に行く。そうしないと気が済まないらしい)から帰ってくると、桜は私達にへこりとお辞儀をして退散する。だから木の絵を描くのは、毎日一時間ちよつとの間だけ。スケッチブックが大きいから、なかなか描きあがらない。この調子じゃ、あと二週間はかかりそうだ。

「描きあげます」

「お、久々の言いきり……」

桜は「今、なんと？」と言う代わりに私を見上げる。私は誤魔化すために、桜から木へと目を移す。微弱な風に、ひらりと花びらが二枚ほど落ちた。

「そもそも、来週の水曜日でもつかない……」

「俺が……？」

なんだ、今の返答は。私はしばらく考えて、ようやくこの男の中では、自分がこの木の妖精という設定になっていることを思い出した。設定の順守と正しい髪の色といい、役作りだけは

大したものだ。

「まあ、貴方がというよりはこの木が。そろそろ、花が全部散つちやいそうだから」

「去年は……？」

「去年の今頃は風が強かったでしょう？」

「そうなんですか？」

「だから、去年の今頃にはもう散つてたと思うけど……。今年は今週の水曜日までもつか……ギリギリかも」

桜は筆を握りしめて、スケッチブックをじっと見つめた。分厚い眼鏡の向こうで、迷っているような、何かに苦しんでいるような目が揺らいだ。

「まあ、分らないけどね。今年はその年に、風強くないし、散るのが、遅くなるかも……」

どうして私が、桜を慰めようとしているのか、私にも分からなかった。へたくそな気休めだ。もう、桜がスケッチブックに描いている木と、今日の前にある木の姿は、かなり違っているはずなのに。桃色の絵の具が乗った。パレットを見れば分かる。

「……今、どのくらい描けてるの？」

内気そうなこの男のことだ、見せてくれないだろう。

「やっぱいいわ」が口を出かかったとき、桜はスケッチブックを私に向けて掲げた。

「……上手い」

私はほとんど無意識に、縁側を降りてスケッチブックに近づいた。

地味で頼りなく、けれど凛と背を伸ばした幹。淡く、こぢんまりとした、儂い桃色。描きかけではあるけれど、あの日おじいちゃんの上で見た、カメラの画面に映った木の姿そのものだった。見たままじゃない。この木を見た人が感じる、儂さの中にある強さが、この絵の木にはあった。

「すごい、本当に上手。桜君、貴方これで食べていけるよ」

桜はなぜか、俯いて首を横に振った。

「……なんでよ？ ああ、そうだ。貴方、きつと美大生でしょ？」

頷いてはくれなかった。けど、この沈黙は肯定だ。

「卒業して、何になるのか分からないけど……たぶん、絵を描く仕事したいんですよ？ 私、桜君の絵が好きだから、貴方の絵、お金出して買おうよ」

「卒業、できないかもしれません」

桜は、彼の描く絵からは想像できないほど、力なく笑った。

「せつかく褒めてくれたのに……ごめんさい。せつかく入れたのに……結局、何もできないのかもしれないんです」

「どういうこと？」

「手術するからです。失敗したら、別の病院に行くんで、俺も今より危なくなるので、もう通えないかもしれません」
聞かなきゃよかった。……聞かなきゃよかった。

来週の水曜日は、あつという間に来た。木の桃色はもう、緑に覆われてほとんど見えない。桜の足元に桃色の絨毯が敷

かれていた。桜の目はずっと、木とスケッチブックを行ったり来たりしている。他のものには目もくれず、ただひたすらに、先が桃色に染まった筆を動かしている。

「桜君。おばあちゃんが、『お茶飲んでいきな』って。桜餅も買ってきてくれたよ」

「……もうずっと、あのへこりとしたお辞儀を見ていない気がする。」

「お気持ちだけで……」

「なんでよ。おばあちゃん、貴方のために買ってきたのよ」

「手術の前日は、胃に何か入れちゃいけないんで……」

ああ、私っていつもこうだ。余計なことばかり聞いて、自分のせいにくせに、勝手に落ち込んで、雰囲気悪くして。

「ごめんね。今の。嫌な気分になったでしょ」

こんな時すらまともに謝れない私は、もう何年も切っていない、井戸にひきこもった幽霊みたいな髪を弄る。

「ああ、そんな、全然……」

「本当？」

「全然……。病院にいと、誰とも話さないんで……話しかけてくれるだけで……全然……」

白い部屋に、白いベッド。他に何の色もない狭い部屋で、桜は何をして過ごしているんだろう。この木を見ていないときの桜は、どんな顔をしているんだろう。

「そう。毎日、退屈？」

桜は曖昧に首を傾げる。

「でも、毎日、こうしている時間があつたんで……」

「どうしてそんなに、この木を描くのが好きなの？ 桃色が好きなの？ 髪も同じ色だもんね」

手術を控えた体で、雨の日も風の日も、桜はここに来た。

「桜は、今じゃないと見られないから。この一枚が最後になるかもしれないから……今じゃないと描けない絵が、今じゃないと見られないものを、描きたかったから」

聞かなきゃよかった。

「描けました」

桜は、完成した木を見せてくれた。とても綺麗だった。けれど、私はスケッチブックの向こうにある桜の顔が、どうしてか気になってしかたがなかった。

「うん。やっぱり上手。今まで見た絵の中で、その絵が一番好き」

「その」絵、と言うのはおかしかった。私はまた、無意識に縁側を降りて、裸足のまま柵から突き出されたスケッチブックに近づいていたから。

「ありがとうございます」

桜はスケッチブックで顔を隠したまま、背を向けて去っていく。聞かなきゃよかった。いつだってそうだ。……でも。

私は土のついた足で、点々と水たまりのように続く敷石を辿っていく。その敷石は、家の門で途切れている。私はこの

居候になつてから、一度しかこの門をくぐつていない。越してきたとき以来、一度も外に出ていないのだ。その引越しを除けば、私はもう四年間、外に出ていないことになる。

縁側は練習台。これが、本当の境界線。いつも、縁側に座つてみたり、足だけ庭に降ろしてみたりしていたけれど、どうしても練習台すら越えられなかった。でもあの時も、さっきも、私はあの桃色を見ると平気だった。

私は境界線から顔だけを出す。それだけで胃液が喉にこみ上げてくる。意を決して顔を上げ、もう遠くなつてしまつた桜の後ろ姿を見た。色味のない、面白くない住宅街で、風に揺られる淡い桃色は、何よりも儂く、そして強かつた。

どうして桜が髪を桃色に染めるのか、分かつた気がした。きつと真つ白な部屋でも、真つ青な手術室でも、この桃色は綺麗だ。

「ごめん！」

大声を出したのは、いつぶりだろう。桜が立ち止まつて、こつちを振り向いたのが見える。

「今まで黙つてたけど！ この木は、この木は桜じゃないの！」
黙つていたというより、ほとんど嘘をついていたようなものだ。
「ずっと嘘ついてごめん！ でも……だから、大丈夫！ これは桜じゃないから、この花が散つても、桜の妖精は死なないから！」

昼下がりのお茶を楽しんでいたであろうおばさん達が、住宅のあちこちから顔を出して私を見る。体中に視線が刺さつて、

吐きそうだ。

遠くで桜が、へこり、と頭を下げた。やつと、やつといつもの桜だ。不思議とこみ上げていた胃液はどこかに消えて、すと息を吸えた。

杏子色の実をたくさんつけた木に、柵の向こうから触れる白い手が見えた。私はお気に入りの花柄の傘をさして、門をくぐつて白い手の主の元へ回り込んだ。

「そこで何してるの？」

「……じゃあ、梅の妖精です」

「嘘おつしやい。……画家なら、メジャーなお花の見分けくらいはついたほうがいいかもね。梅君」

色が抜けて、ちよつと杏子色になつた髪についた無数の雨粒を払いながら、画家の卵は言った。

「ああ……名前は本当に桜なんで……」

私はぼかんとしてしまった。それからおかしくなつてきて、大笑いした。

「上がつて。おばあちゃんが梅のシロップ分けてくれるって」

おじいちゃんは、庭の梅の木の、桃色が好きだった。良い桃色は、今年も良いシロップが作れる証なんだって。